

京都府

まつたに数学塾

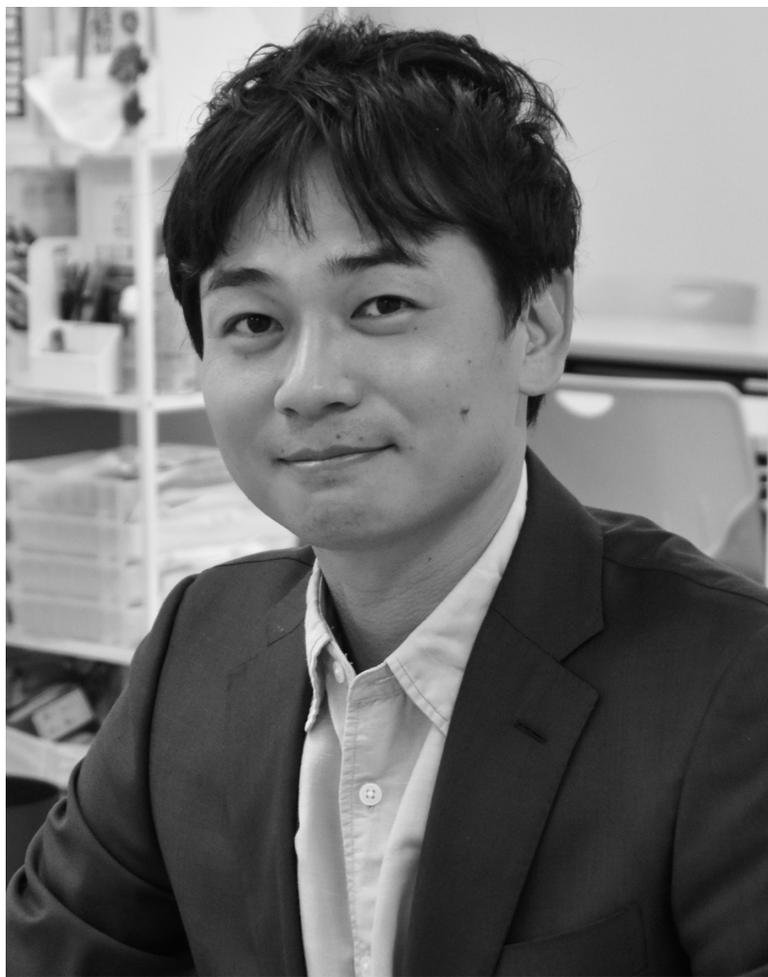
塾長 松谷 学さん

東大まで行って目指す職業ではない。いつしか「先生」という仕事を、そんなふうを考える自分がいた。しかし、本当にそうなのだろうか。僕の中に眠る衝動が叫ぶ。「お前はそれでいいのか?」と。今こそ、内なる声に耳を傾けよう。心からやりたいことに取り組もう。

原始の衝動を忘れて
現実的な道を選ぼうとしていた

人は誰しも、心の中に “衝動” を宿している。こんな自分になりたい、こんな人生を送りたいという、原始的な自己実現欲求だ。

一方で、いつの間にか環境や常識というフィルターに包まれ、その衝動を忘れていくのも人の性だと言えるかもしれない。松谷学(43)



もその一人だった。「そのままいけば、メーカーで研究職に就くはずだったと思うんですよ」と松谷。東大工学部を卒業して大学院ではVR(バーチャルリアリティ)の研究に取り組んだ秀才で、確かに、絵に描いたような理想の研究者の学歴である。しかし、就職活動を迎え

たころから、あるモヤモヤが頭から離れなくなる。自分が取り組んだことが実用化されて形になるまで、だいたいの10年くらいかかるのが研究活動です。また私の研究分野は、人ではなく『モノ』へのアプローチが対象でした。そういう世界にのめり込み切れない自分に気付いたんです。

そんなとき、教師に憧れた少年時代の自分を思い出す。小学3年生のときの、担任の先生がきつかけだ。すごく優しく面白くて、あまり得意ではなかった算数の面白さに気付かせてくれた。その思いは中学生くらいまで抱いていたが「なんとなく封印してしまっていたんです」と松谷は語る。

生徒の笑顔が直接見たい！ 忘れていた衝動を思い出せ

ベネッセで教材開発に従事も
教える楽しさが忘れられなくなる

誤解のある表現になるかもしれないが、教師という職業は、進学校で学び、東大を目指すかという人間が選ぶ職業としてはマイノリティだ。周囲にもそう考

える人は多く、松谷も環境に染まって「そういうものだ」と思ってしまったのかもしれない。それで、当初は研究の道を目指し、教育への関心を思い出してから

も、教師以外で教育に携われる道として、ベネッセ社に就職。教材開発の職に就いた。

仕事は楽しかったが、こ

こでもまた新しいモヤモヤ

が松谷を包む。手掛けた教材に対する好意的なユーザー評価をどれだけ見ても、まったく実感が湧かない。彼らが目の前にいないぶん、物足りなさを感じていたのだ。

そんな折、人事交流の環境で、ベネッセ傘下の個別指導塾に向向して教室長を務めるチャンスが訪れた。松谷は一も二もなく飛びつき、教室長として3年間、その務めを果たす。担当した地域は低学力層の生徒たちも多かったが、それが逆に、広い教育的視野や生徒たちへの寄り添い方を身に

着ける素晴らしい成長機会ともなった。何より、目の前に子どもたちがいることが嬉しかった。

ただ、教室長の仕事は講師育成や教室運営に重きが置かれるものだ。出向期間を終え、ベネッセ本体に戻

ることになったとき、松谷は再び悩むことになる。この経験を活かしてベネッセで頑張ることもできたが、「もっと自分で子どもたちに教えてみたい」という「衝動」が膨らみ続けていたのだ。

松谷 学 MANABU MATSUTANI



●まつたに数学塾
<https://matsutanijuku.com/>



文 / 松見敏彦(トリガーワークス)

「今しかない」と塾の世界に飛び込む

そのとき、高校時代に通った数学塾の恩師から「(うちの)塾に興味はあるか?」と声がかかった。とても嬉しかったが、リスクもある。収入だって大きく下がるし、結婚して子どもも生まれればかり。迷わなかったと言えは嘘になるだろう。しかし、「衝動」は

もはや抑え込めない。「いつか自分で塾を経営し、生徒たちと直接向き合っていたいなら、今しかないと思いました」と松谷。将来的な独立を前提に修行のつもりで5年間働かせてもらい、2022年3月、「まつたに数学塾」を開いた。

授業はすべて松谷が受け持っている。(敬称略)